

2021年度

人権作品集

「人権」に関する標語選定作品 中学二年生

画面じゃなく
目を見て話そう
友達と



人権に関するポスター選定作品
小学6年生



人権に関するポスター選定作品
中学3年生

「人権」に関する標語選定作品 小学六年生

ふと言った
軽い言葉も
心の傷

はじめに

名張市・名張市教育委員会・名張市人権啓発まちづくり事業推進会議では、日常の家庭生活や学校生活、社会生活などでの体験を通して実感された、人権を守ることの大切さや偏見・差別などの社会の不合理をなくしていくことへの思いを表現した人権作品を、市民のみなさまから募集しています。

本年度も、小学生・中学生・高校生をはじめ市民のみなさまから、作文・標語・図画・ポスター・メッセーじの作品を、合わせて一一、七二九点応募いただきました。たいへん多くの方々が、人権作品に取り組んでいただいていることに対し、感謝を申し上げます。

提出していただいた作品の中には、家庭や学校・社会生活で自ら体験したことや感じたこと、そして学習で学んだことを通して、人権尊重の大切さや、差別をなくしていくための意見、感想が述べられているものや、自分自身を振り返り、差別をなくしていくこうとする姿勢や意欲が伝わってくるものが数多く見られました。

この作品集は、応募いただいた作品の中から、作文十作品、標語十三作品、図画・ポスター二十作品、メッセーじ五作品を選定し、掲載しています。本誌を、人権について考えるきっかけとするとともに、さまざまな学習の場でご活用いただければ幸いです。

なお、これらの作品の中から、図画・ポスターの一作品、標語の一作品を人権啓発用ティッシュに、そして、図画・ポスター八作品、標語五作品、メッセーじ一作品を二〇二二年の人権カレンダーのデザインとして活用させていただきました。ありがとうございました。

目次

作文

【小学生の部】

- ありがとうっていいな
- 外国のお友だち
- 意地悪をしてしまったこと
- いのちを助けてもらった
- しょうがいのある人となない人
- 人権の階段
- 伝えて変わったこと
- だから今の自分がある

	学年	ページ
ありがとうっていいな	一年生	4
外国のお友だち	二年生	6
意地悪をしてしまったこと	三年生	8
いのちを助けてもらった	三年生	9
しょうがいのある人となない人	五年生	10
人権の階段	五年生	11
伝えて変わったこと	五年生	13
だから今の自分がある	六年生	14

【中学生の部】

○認め合うということ

一年生 . . . 15

○私の弟について

一年生 . . . 17

標語

【小学生の部】

. . . 18

【中学生の部】

. . . 19

メッセージ 「あなたの大切な人へ」

. . . 20

【高校生・高等専門学校生・一般の部】

図画・ポスター

【小学生の部】

. . . 21

【中学生の部】

. . . 24

作文【小学生の部】

ありがとうっていいな

(小学一年生)

ぼくはしようともにっています。

しようともっていうのは、まいしゅう木ようびに、がっこうからじどうかんにいって、しゅくだいをしたりあそんだりなにかをつくったりするところです。一ねんせい

は、十人のともだちがしようともにはいっています。ぼくがしようともにはいったわけは、じどうかんの人

がしようとものおはなしをしにきてくれたとき、「たのしそうだな。」とおもったからです。

いえにかえっておかあさんにそのことをいうと、「しようともは、みんながなかよくするためのべんきょうを

と、おしえてくれました。それでぼくはしようともにはいりました。

じどうかんについたら、まずしゅくだいをします。しゅくだいはやくおわったら、みんなであそんでせんせいがくるのをまっています。

そのひは、五人でにおにごっこをしました。さいしょおにぎめをするとき、みんなが「おにはいやだ。」とい

けんかになりました。ぼくも、おにになるのはぜったいにいやでした。だっておには、ぜんいんタツチなくちやいけなくて、ずっとはしるのがしんどいことがわかっていたからです。それで、けんかになりました。するとSくんが、

「じゃあ、ぼくがおにになってやるわ。」と、いいました。

するとけんかがおわって、みんなでおにごっこができました。

ぼくはそのときSくんがみんながいやだといっているからおにになってくれて、やさしいなあとおもいました。ぼくもみんなも「ありがとう。」といいました。Sくんのおかげでたのしいおにごっこになりました。ぼくも、そのぐらいやさしいおにになりたいとおもいました。「ありがとう。」っていっぱいいてもらえる子になりたいとおもいました。

それから、じぶんのことだけじゃなく、ともだちのこともかんがえるようになりました。じどうかんのくるまのおもちやであそんでいるとき、「かして。」っていわれました。いままだだったら、「あと一ぶん。」とかいっていただけ、「いいよ。」といえるようになりました。

いいことをしたらともだちは「ありがとう。」っていつてくれます。ぼくは「ありがとう。」っていつぱいいわれ
ていきもちです。しょうともでも、がっこうでも「あ
りがとう。」をいつぱいふやしたいです。

しょうともにはいつて、おともだちとなかよくするこ
とがだいつてわかりました。おかあさんのいつたとお
りでした。おもちゃをつくったりするのまたのしいです。

しょうともにはいつてよかつたし、ぼくはしょうとも
にいくのがとてもたのしみです。

外国のお友だち

(小学二年生)

わたしのクラスには、ブラジルの友だちのAくんがいます。はじめてAくんを見たときに、外国の子かなと思いましたが、Aくんが話しているのを聞いて、みんなと話し方がすこしちがったので、外国の子だと分かりました。家にかえってママに、

「外国の子がクラスにおるねん。」

と言いました。ママは、

「じゃあ一日一回、話しかけに行ったら。」

と言いました。わたしは、

「しゃべりに行ってみようかな。」

と言いました。

つぎの日、わたしの言っている日本語がったわるかドキドキしながら、Aくんに話しかけに行きました。でもAくんはもうクラスの子とあそんでいました。わたしは、日本語が話せないのに、もう友だちをつくっていてAくんはすごいなと思いました。それからわたしはAくんに話しかけに行きました。

「おはよう。」

と言ったら、

「おはよう。」

とかえしてくれました。言い方はみんなとすこしちがっ

たけれど、あいさつができました。

「アイスってポルトガル語でなんて言うの。」

と聞きました。Aくんは、

「ソウブエジ。」

とこたえてくれました。わたしは、

「ありがとう。」

と言いました。Aくんは、にこっとわらってくれました。

それから何回かポルトガル語を教えてもらいました。

生活のべんきょうでポルトガル語かるたをつくりました。

「なくってどうやって言うの。」

と聞くと、教えてくれましたが、うまく聞こえませんでした。

もう一回聞くと、

「ちがう。ラキマス。」

ともう一回ゆっくり言うてくれました。わたしもまねして

言ってみると、やつとうまく言えてうれしかったです。

Aくんもうれしそうでした。

Aくんと友だちになってすごいなと思うところが二つあります。一つ目は、みんなよりたくさんべんきょうしているところです。一年生のときはいつもひらがなやカタカナのカードを何回もして、日本語をおぼえようとしていました。読めないときは、どうやって読むかじ分で聞くこともしています。わたしだったら話せないとおふあ

んだけれど、Aくんはふあんな顔をせずにはがんばって
ます。二つ目は、じ分から友だちに話しかけにいけどこ
ろです。うまくつたわらなくても、まちがっていても、
何回もつたえようとするところがいいところだと思いま
す。

Aくんは日本語がとても上手になっています。でも、
聞くことはできて、まだまだ言いたいことがうまくつ
たえられなくてこまっているようがあります。わたし
はAくんと話をするときに、分かることばをさがしなが
らしっかり聞くことにしています。話すときはすこしだ
けみんなよりゆっくり話すようにしています。これから
もAくんがうまく友だちに言いたいことが言えなくてこ
まっているときには、何回も言いたいことを聞いて、何
を言いたいかわかるようにしたいです。かわりにつたえ
てほしいときは、わたしがAくんのかわりに言いたいで
す。Aくんとこれからもなかよくしたいです。

意地悪をしてしまったこと

(小学三年生)

ぼくは、友達と遊ぶ時が一番楽しいです。ときどきけんかをするときもあります。その時はなか直りすることができると、いつもいやな気持ちのこりがあります。自分があやまる時も友達にあやまってもらう時も、どっちの時もいやな気持ちのこることがわかりました。自分があやまったときは相手の子に「いよ」って言うてもらっても『ほんとうかな』ってでもやもやした気持ちのこりがあります。相手の子もぼくがいやな気持ちにさせてしまったから、ゆるしてくれてもいやな気持ちは心にのこっていると思います。だから、なか直りをしたっていやな気持ちはずつとなくならない気がします。

そんな気持ちにならないためにも人を大切にしなければいけないと思います。なぜ人を大切にするか、それはお母さんにうんでもらってひとりひとり大切にされているからです。それにお母さん達はぼく達のことを守ってくれているからです。

でもぼくは三年生になって、自分がされていやなことを人しないで先生におこられたり、先のことを考えずに行動しておこられたりしました。それは通学はんで集まる集合場所でも、みんなで一人の子に意地悪をして、その子がかなくくなるのもわかっていなければずつとやってしまったことです。ランドセルをひっぱったり、中の物を出したり、いやな言葉を言ったり、もつとひどいこともしました。相手の子がいやな気持ちになっっているとはわかっていたのにつづけてしまいました。やめられなかったのはぼくが楽しかったからです。自分がされたらめっちゃめっちゃおこっていたと思います。後で先生たちとの話で、ぼくたちがしていたことはいじめだとわかったけれど、ふざけて

やっていたことがいじめだとは思っていなくて、びっくりしました。

通学はんの先生に呼ばれました。だれがだれに何をしたのか聞きました。手をあげるだけで、自分から言えませんでした。教室でも先生に聞かれたけれど、おこられるからだまっていました。先生はいっしょにしていた他の子達からも話を聞きました。だからぼくはぼくの順番がもう一度来た時に話をしました。そして先生にどうしてその子に意地悪をしたのか聞かれました。でもいえませんでした。家に帰ってお母さんと話をして分かったのは、その子が何をしてもおこらないからだということでした。本当はその子もぼくみたいにおこりたかったと思います。でもおこれなかつたんだと思います。それはぼくがこわいからだと思います。おこれなかつたら何をしてもいいわけじゃない、意地悪をしていた時はそんなことをぜんぜん考えませんでした。

ぼくは先生やお母さんといっぱい話をしました。そして相手の子にあやまりました。許してくれたけれどきつと心には、いやなことがのこっていると思います。ぼくの心の中にもひどいことをしてしまったなど、もやもやがのこっています。

それからぼくは、あまりけんかもしてないし、先生に注意されることも少なくなつたと思います。ぜつたいしてはいけないことをしたと思っっています。それから意地悪をしていないとむねをはって言えます。意地悪をしてしまった相手の子とも今はなかよくなつて、遊ぶようになりました。そしてぼくは今、いじめをなくす人になりたいと思っっています。

いのちを助けてもらった

(小学三年生)

生まれた時、お母さんとかんごしさんとわたしは、びょういんにいました。

生まれた時、わたしは心ぞうが止まっていたそうです。かんごしさんが、心ぞうマツサージをずっとしてくれました。わたしはお母さんの手のひらぐらいの大きさでした。本当に小さく、死んでもおかしくなかったそうです。それでも、なんとか心ぞうが動きはじめ、お母さんはかんごしさんにこう言ったそうです。

「おねがいます。」

何ども何ども心ぞうマツサージをしてくれたそうです。わたしは、それを聞いて、いのちを助けてくれたかんごしさんにお礼を言いたいと思えました。特に、心ぞうマツサージをしてくれたことをすごく感しゃしています。「ありがとうございます」の言葉しかありません。

お母さんとお父さんもいそがしい中、いつも遠いびょういんに通ってくれて、

「びょういんに行かない日はなかった。」

と言っていました。お父さんとお母さんにも感しゃしています。

それから、わたしは、お母さんにかんごしさんがわたしのお世話をしてくれている写真を何まいも見せてもらいました。とても小さくてこわれてしまいそうなたしを助けてくれている写真でした。ミルクをあげたり、だっこしてもらったり、いろんな写真を見せてもらいました。それを見ていたら、夜も昼も朝もずっとお世話をしてくれて、わたしは、かんごしさんと感じました。その様子を見たり、聞いたりして、わたしは、かんごしさんがわたしのためにたいへんなことも一生けんめいやってくれていたことに気がつきました。そのおかげで、今のわ

たしはこうやって生きていられます。だから、助けてもらったこのいのちを大切にしたいと思えました。

そして、自分みたいに小さく生まれた子やびょういんになった子をたくさん助けたいと思えました。かんごしさんが、わたしにしてくれたようにじぶんもかんごしさんになって、いのちを助けたいです。「ありがとう」の気持ちをつたえていきたいです。わたしは、たくさんの方が私のことを考えた行動をしてくれたことで、いのちを守ってもらいました。いのちは、とても大切なものだと思いました。

一学きに学校で、「自分の行動を見直そう」というべん強をしました。「友だちの気持ちをききつけていないか」「自分や友だちを大切にしているか」考えようということでした。友だちにいやなことを言ったり、相手がききずくような落書きを書いたりすることは、いのちを大切にしていることだと分かりました。家族やかんごしさんに大切にされてきたように、学校の友だちも同じように、大切に思ってもらっているいのちだと思います。だから、わたしは、友だちの気持ちを考えて行動したいと思いました。さい近は、こまっている子がいたら、「大丈夫。」と声をかけています。こけている子がいたら、「一しよに保健室について行こか。」と声をかけたり、みんなが、けがをしないうように、ろう下を走っている子がいたら、「走ったら、あぶないで。」と言うようにしたりしています。少しずつ自分がまわりの子につたえることで、みんなのいのちを大切にしたいと思えました。そして、いのちを助けるべん強をたくさんして、自分や友だちの気持ちをもっと考えて、いのちを大切にできるかんごしさんに近づいていきたいです。わたしを助けてくれて、本当にありがとう。

しょうがいのある人となない人

(小学五年生)

パラリンピックが今年の夏に行われました。出場する選手を紹介する番組をテレビで見ました。生まれつき身体にしょうがいがあった選手、事故で足を失ってしまった選手が紹介されていました。私は「かわいそうだな」と思いました。でも、一つの人権作文と出会い、考えが変わりました。

しょうがいがあるからといって、すべてがかわいそうじゃない。体に不自由なところがあるから生活するのに不便なことがある。でも、ただそれだけのことなんだよ。

私は、これを読んで後かいました。車イスに乗っていても、食べることはできる。買い物だってできる。たった一つ歩けないということだけで、見下したり、差別したりするのはおかしいと思います。耳が聴こえない人だって、聴こえないからこそ、手話ができる人だっています。すごいです。だから、しょうがいがあるだけで、「かわいそう」と思っはいけないと思いました。むしろ、みんなちがっていいから、ちがいがあはることは一つの個性だと思はいます。

私たちの社会を見ても、様々な工夫がされています。手話で通訳をしている人、音声信号、点字ブロックなどがあります。このように、周りの工夫次第で、しょうがいがある人もない人もみんなが暮らしやすく思はいます。

家族で電車に乗って、水族館に行ったとき、駅員さんが、車イスに

乗っている人が電車に乗るのを手伝っているところを見ました。車イスに乗っている人は、駅員さんが手伝ってくれて、「ありがとう」と思はるうし、駅員さんも「ありがとう」と言われてうれしい気持ちだったと思はるから、おたがいうれしい気持ちになつたと思はいます。このように、人の接し方で生活しやすくなることがあるのだと思はいます。

私にも、接し方でお互いが気持ちよくなつた経験があります。

私は、四年生の時、となりの席の子がさみしそうに思はることがありました。私は、楽しい気持ちになつてほしかつたから、その子が好きだと思はる本の話をしたことがありました。今年も、ブランコで遊んでいると、代わつてほしそうに思はる子がいたので、代わりました。そして、その後、喜ぶかなと思はつて、押して一緒に遊びました。

私は、これからも、しょうがいがあるから「かわいそう」と思はるはなく、ちがいは、みんなそれぞれあるのだから、一つの個性だと思はつて、みんなが生活しやすしいような社会に思はるかなければ思はるかなと思はいます。だから、どんなことをしたら、うれしい気持ちになつてくれるかなと思はる、行動できるように思はると思はいます。

人権の階段

(小学五年生)

僕が三年生のころの出来事です。クラスの誰かが持ってきたカブトムシが死んでしまった。その時にぼくはカブトムシの前で立って見ていました。それを見たある子が、

「お前が死なせたんやろ。」

と言ってきました。ぼくは、

「絶対にそんなことをしていない。」

と言ったけど、

「絶対にお前や。」

と言って決めつけてきました。その様子を見ていた大勢の子達が「謝れ。」と口々にぼくに強く言ってきました。ぼくはその時に、これはちがう、おかしいと思いました。その時は大勢で責められて怖かったし、どうしたらいいのかが分かりませんでした。だから、もしぼくが悪口を言いたい気持ちになったとしても、その気持ちをぐっとこらえ、悪口を言わないようにしています。もしそのことでがまんができなかったら、先生に相談するか、三年生の時に経験したことを思い出してつらい思いをしている人の立場に立って考えることを意識しています。

五年生になって友だちになった子と鬼ごっこをすることがありました。ある子が、

「あの子、性格が悪そうだから鬼ごっこに入れやんとこ。」

と言っていました。近くにいた友だちも、その友達と一緒に言っていました。その時に、ぼくは三年生の時に同じことをされたことを思い出しました。こ

れはだめだなことだと思って、勇気を出して、

「それは決めつけじゃないの。」

と言いました。すると、一緒に鬼ごっこをする周りにいた友だちも、

「確かにそれは決めつけやなあ。」

と言ってくれました。そしてある子は、

「そうやな。」

と言って決めつけたことに気づいてくれて、言ったことに対して気まずそうにしていました。ぼくは、周りの友だちがぼくの言ったことに対して共感してくれたことがうれしかったです。自分が言っていることが正しいことだったんだと思いました。でも、それでもまだあおっている人もいました。

その時にぼくは、本当にこの人たちがぼくの友だちでいいのかと悩みました。ずっと一緒に遊んでいると、決めつけはいけないと分かっているけど、いざ自分も決めつけをしてあおる方に流されてしまうのではないかと不安になりました。だから、その人たちの関わり方を考えるようになりました。

自分の経験したことは心の中で一生残るものじゃないかなと思いました。理由は、ぼくが三年生の時に決めつけられたことが今でもはつきりと心の中に残っているからです。だから、ぼくよりもいじめられた人たちは、ずっと心の中に残るのではないのかなと感じました。一度言われた悪口は、ひびくし、心からずつとはなれないと思います。もしぼくが三年生の時と同じように決めつけられるような経験があったら、

「それはちがうことだよ。」

と、言えるはずだと思います。

最後に、いじめや悪口、暴言、決めつけをしている人は、人の権利を奪っていることにつながります。いじめられた人たちは、その経験があるからこ

そ周りでいじめが起こった時にそれはおかしいことだ、許されないことだ、と気づけるし、行動できることにつながるのだと思いました。その時の状況やその人のことを何も知らないのに、ぱっと見ただけで判断して責められてしまうことほどつらいものはないと思います。物事や状況をよく考えて判断できるようになりたいと思います。ぼくは経験してきたからこそ、決めつけは許されないことだと強く思うようになりました。友だちがつらい思いをしている場面を見たら、

「決めつけはおかしいよ。」

と決めつけた子に言っていきたいです。

伝えて変わったこと

(小学五年生)

ぼくは、時々人がからかわれているのを見かけます。けれど、止めに入れないことがあります。

ぼくには、低学年の時から仲の良い友だちのAさんがいます。ぼくは、Aさんのかく絵が好きで一緒にいてとても楽しいです。Aさんはコミュニケーションをとるのが少し苦手です。だけど、Aさんの表情を見ると、喜んでいたり悲しんでいる時が分かります。

最近、トイレの仕方で考えることがあります。ぼくの友だちのAさんはトイレをする時、ズボンを足までおろして用をたします。そのことを一つ上の学年のBさんたち(友だち)が見て笑います。ぼくは、そのことが許せませんでした。けれど、いつも何もできずに終わっていききました。

ぼくは、Aさんのことをあざ笑った人も許せないし、自分も許せませんでした。なぜ、その時すぐにあざわらったBさんたちを止められなかったのか分かりません。一つ上の学年の人だったからなのか、Bさんたちが友だちだったからなのか分かりませんでした。

そこで、友だちとは何なのかをもう一度考えました。友だちとは、本当にいけないことをしていたら止められるのが友だちだと思います。注意できなくてごめんなさい……。

もし、ぼくがそこで注意できていたら、もうBさんたちは笑わなくてすむかもしれないのに何もできませんでした。

次に笑われているところを見かけたら、「そのことで笑うのは間ちがっている。」

と言いたいと思いました。

ぼくは悩んでいたのですが、このことを母に相談しました。母は、「先生に相談したらどう。」

と、言ったので、担任の先生に伝えることにしました。

「よく教えてくれたね。六年生の先生にも知っておいてもらったほうがいいよ。」

と、担任の先生に言われたので、六年生の先生にも伝えました。伝える時、すごく不安でドキドキしていました。それからは、BさんたちはAさんのことを笑うことはなくなりました。

最近の人権学習で、「行動に移す」ということを学習しました。ぼくは、今までだめだと思っても行動できずに終わってしまっていて、今は後かいています。だけど、このままAさんのことを放っておいたらずっと友だちでいられなくなると思ったし、Aさんが傷つくと思ったから、ぼくは行動できてよかったと思いました。六年生の先生に伝えた時、今まで重かったものが軽くなったような気がしました。そのことを担任の先生に伝えたら、「ありがとう。頑張って伝えることができたね。」

と、言われてうれしかったし、次もし同じことがあったら声をかけていこうと勇気が出てきました。

これからも、みんなが安心して生活ができるように困った人がいたら声をかけていきたいです。

だから今の自分がいる

(小学六年生)

私には、タオルやハンカチを匂う癖があった。五年生のころ、それを見た周りの友だちに「きもい」「来やん」といって「などと言われ、煙たがられたり、グループから外されたりした。私は、それを一学期から二学期の間は我慢していた。「汚い」という言葉を言われるたびに、どんどん学校に行きたくないと思うようになっていた。私は「ほんとにむかつく」「こっちに來るな」や「どうやったら反論できるか」などとずっと考えていた。そして、我慢の限界を超えたとき、私に嫌な言葉を言っていたAさんを思いっきり叩いてしまった。でも、それでは、何も解決しなかった。むしろ、それからAさんだけでなく、他のグループの友だちからも嫌な言葉を言われるようになってきた。嫌な言葉を聞くたびに嫌な気持ちが積み重なった。いつの間にか、クラスみんなが私のことを「汚い」と認識しているのではないかと、関係のない友だちまで疑うようになっていた。私は、「反論したらさらに嫌なことをされる」と思い、どんなに嫌な言葉を言われても、ただただ黙り続けようとした。だれかに相談しようとしたけど、勇気が出なくてなかなかできなかった。そのせいでストレスがたまり、家でも怒ったり、泣いたりすることが多くなった。学校のことを考えると、つらくて部屋に引きこもることもあった。そこで、何とか勇気を出して仲がいい友だちや家族に相談してみた。すると、嫌な言葉を言っていたみんなと話し合うことができた。そして、みんなが私のこれまでのつらさを理解しようとしてくれた。また、私への言葉は冗談のつもりで言っていたということもわかった。その結果、仲直りすることができた。今では、その人たちとも仲がいい友だちとして過ごして、楽しい学校生

活を送っている。

このころの私は、相手を拒絶したり、相手に対抗したりすることばかり考えていた。相手とわかりあうことなど考えたこともなかった。それは、ずっと一人で悩んでいたからだ。すぐに友だちや家族に相談すればよかった。そうすれば、問題を解決するためによりよい方法が見つかるからだ。しかし、自分から相談するには、とても勇気が必要だった。そこで、もし、私と同じように悩みを一人で抱えている人がいたら、相談に乗ってあげたい。でも、自分から相談することは難しい。だから、私は悩んでいることに気づくことができる人になりたい。そのために、誰とでも仲良くなることを日ごろから気をつけたい。みんなと仲良くなれば、私のように、仲がいい友だちとして相手から相談してくれるかもしれないし、私も相手が悩んでいることに気づけるかもしれないからだ。そして、みんなが仲良くなれば、悪口やいじめがなくなり、過ごしやすくなると思う。今後、私と同じような思いをする人が出ないように、私はみんなと仲良くなる。そして、自分も周りの人も居心地のいい学校生活を送れるようにしたい。

作文【中学生の部】

認め合うということ

(中学一年生)

私は、アニメやゲームが好きな、いわゆる「オタク」です。そのことを今まで恥ずかしいと思ったり、隠したりすることもありませんでした。小学校の頃からそうだったので、中学校に入學してから、特に何も思わずに周りにそれを話していました。だから、クラスメイトも皆そのことを知っています。

入学してからは、同じような「オタク」の友達もでき、楽しく過ごしています。しかし、ある時、私は母から、

「あなたが、『オタク』ってこと、皆知ってる？気持ち悪いって言われたり、いじめられたりしてない？心配やわ。」

と言われました、私はおどろいて、誰もそんなことを言わないし、いじめられていないと答えました。そして、母がなぜそんなことを言ったのか聞きました。母は、自分が中学生だったころのことを話してくれました。

母が中学生だったころは「オタク」は、今より周りから理解されておらず、「オタク」という言葉自体が差別的な意味でつかわれていたそうです。「オタク」は少し特別な目で見られ、馬鹿にされたり、皆と違う変わり者と思われることもあったそうです。私は、その時代に生まれていなくて良かったと思えました。母も、私がそんな目に合っていないことを聞いて、安心したようでした。そして、「時代が変わったんやなあ。」と言いました。

私はそれを聞いて「オタク」のことを少し調べてみました。一九

七〇年代にできた呼び名で、元々は、アニメやゲーム、マンガの愛好者を指す言葉だったそうです。しかしはじめは「オタク」は蔑称(バカにしたり、見下して使う呼び名)であったと書かれています。二〇〇〇年代に入ってから、テレビやインターネット、SNSなどでオタク文化が広がり、多くの人に理解されるようになったようです。また、海外でも日本のアニメや漫画が人気ですが、愛好者のことを「OTAKU」というそうです。今では、昔のように差別的な呼び名ではないと分かりました。

母は「時代が変わった」と言いました。私は、昔も今も「オタク」の側は何も変わっていないと思います。変わったのは周りではないでしょうか。例えば「私は野球がすごく好きです。」と言って、見下されたりいじめられるようなことは今も昔も無いと思います。それは、周りの人が野球とはどんなものかを知っているからです。昔は、今ほどすぐに何でも情報を知ることができなかったと思います。ですから「オタク」と呼ばれる人たちのことを分かっている人も少なかったと思います。自分がよく知らない人や物ごとに対して、分からないから怖い、近づきたくない、という気持ちがあり、それが差別などにつながったのではないのでしょうか。今では、アニメやゲームを好きな人がたくさんいて、理解が進んできたので、差別などがなくなったのだと思います。変わったのは、時代と「周りの考え方」だと思います。

私も自分の知らないこと、初めて聞くことなどについて、少し怖いと思ったり、よく知らないうちから否定してしまったりすることがあります。けれど、初めに先入観を持つたり、自分の持っている情報だけで怖がったり、拒否するのはやめようと思えました。自分の周りのことや相手のことを理解することが大切だと分かり

ました。

小学校で、金子みすゞさんの詩を習いました。「私と小鳥と鈴と」という詩です。「みんなちがって、みんないい。」詩の中に出てくる言葉です。私はこの言葉がとても好きです。私の友達には、ダンスが上手な子、アイドルに夢中な子、サッカーが好きなお子、走るのが速い子・・・いろいろな子がいます。好きなもの、好きなこと、得意なことは皆それぞれ違います。私はアニメやゲームが好きで、絵を描くのが得意です。周りは皆それを認めてくれています。だから私は堂々と自分のことを「オタク」だと言えるのです。誰かが自分を認めてくれるというのは、とてもうれしくて、幸せな気持ちになります。同じように、私も友達のことを認め、応援しています。ひとりひとり好きなものや得意なことが自分と違うのは、当たり前です。それでも、相手のことを理解し、認め合うことができたら、もっと素敵な世界になると思います。

私の弟について

(中学一年生)

私には、小学五年生の弟がいます。いつも明るく元気な子です。そんな私の弟には生まれつきダウン症という障がいがあります。知能や運動の発達がおくれていたり、上手にしゃべることができなかつたりする障がいだとお母さんから聞きました。ふつうの小学校に通うのが難しかったので特別支援学校という弟と同じように障がいを持った子たちの集まる学校に通って、自分に合ったレベルの勉強や運動をしています。

弟は何をするのも一生懸命でいつもニコニコしていてとてもかわいいです。

一度、スポーツレクリエーションという運動会みたいなものを見に行つたことがあります。準備体操のダンスをノリノリでやっていたり、競技では、脱線するけどまた競技にもどってきたりで笑いをとっていました。

たとえ障がいがあつたとしても、いつも笑顔で明るく、楽しそうにしている弟たちのそういうところが素敵だなと思いました。

正直、弟がダウン症じゃなかったら、ダウン症のことを全く知らなかつたと思います。インターネットで調べても、いいことは書かれていません。

ただ21番の染色体が通常2本のところが3本あるだけで世間では、障がい者と呼ばれてしまいます。

私もそうだけど他の人とちがう事をしている人を見ると、「えっ？何あれ、こわい」と思ってしまう。

弟と一緒に出かけたときなど周りの人にじろじろ見られるとき

があるので弟もそういうふうに見られているんだなと思いました。

弟が声を出せるようになってからは、何を言っているのかわかるみたいでどうしてかなと思っていました。

それは、弟が何を言っているのかを理解しようとしていなかったからだと思われました。そして、理解して聞こうとすると、だんだん何を言っているのか分かってくるのです。弟の言っていることに対して受け答えすると、弟はうれしそうに私にたくさん話しかけてくれるようになりました。今では、生意気なこともたくさん言ってくるし、ケンカのようになる時もあります。

まだまだ世の中では、障がい者に対する理解や態度は冷ややかなものだと思います。完全に理解してほしいとは言いませんが、ほんの少しでも個性なんだと理解してもらえれば、もっと障がい者が住みやすい世の中になるんじゃないかなと思います。これからは、障がい者やそうではない人も関係なくすごせたらいいなと思いました。

みんなが理解しあえば障がい者だからキモイとか、こわいなどを言われることが少しでもなくなればいいなと思いました。そして障がい者の人たちでもキモイとかこわいなどを言われなくなつていい世の中に少しずつなっていくといいなと思いました。

標語

【小学生の部】

学年

・せいかくも 見ためもちがう それがいい

五年生

・伝えよう 自分の気持ち 自分の声で

五年生

・だめなこと はっきりいおう 友のため

五年生

・このせかい いらないうち ないんだよ

五年生

・じょうだんも 人の心は きずつくよ

五年生

・ありのまま 自分が一番 かがやける

五年生

・ふと言った 軽い言葉も 心の傷

六年生

・気づいてる？ 見て見ぬふりも 加害者です

六年生

【中学生の部】

学年

・「やめようよ」 その一言が 言えますか？

一年生

・画面じゃなく 目を見て話そう 友達と

二年生

・誰だって輝ける場所きつとある

二年生

・気づいてよ 笑顔の裏の ヘルプサイン

三年生

・「やめよう」と ひとこと言える その勇氣

三年生



メッセージ「あなた大切な人へ」

最優秀賞

「お母さん」へ

私の前での母はいつも元気で難病を患ったと聞いても辛そうな顔を一つも見せませんでした。でも、私が見ていない所でともしんどそうにしている、私はなぜ気付かなかったのだろうと後悔しました。今までは母に支えられてきたけど、今度は私が母を支えていきます。だから、私を頼ってください。

(高校2年生)

優秀賞

「お母さん」へ

入院している時、私が夜一人で寝るのが怖いからと必ずお母さんは隣の小さな椅子に座って一緒に居てくれたね。そして今も毎日家族のために食事を作り、洗濯をしたり、本当にいつもありがとう。普段は恥ずかしくて伝えることはできなかったけれど、これから先も唯一の母を私は、愛し、尊敬しています！

(高校1年生)

「父親」へ

毎日学校の送り迎えありがとう。入学当初から学校生活に不安を抱えてた私の話を聞いてくれアドバイスをくれて沢山の勇気もらっています。父と過ごす車の中での一時間は私の人生の中でも大切なものです。これから三年間、一緒に歌ったり面白い話をしたり笑い合っ楽しんでもうね。いつも、ありがとう。

(高校1年生)

「見守りの田村さん」へ

いつも登校の時私達の安全のために気をつけて下さりありがとうございます。猛暑のような夏の日も、雪が降るような寒い日であっても毎日私達を見守って下さいました。小学生の時ふざけている生徒を真っ先に注意する姿、とてもかっこよかったです。これからもお体に気をつけて元気に過ごして下さい。

(高校1年生)

「ばあば」へ

いつも親身になって話を聞いてくれてありがとう。今まで何度もばあばの「大丈夫」に助けられてきました。受験の日の朝、慣れないLINEで送ってくれたメッセージにはとても勇気づけられました。返信返せなくてごめんなさい。これからもたくさん迷惑かけると思うけれどよろしくお願いします。大好き。

(高校1年生)

《小学生の部》



1年生



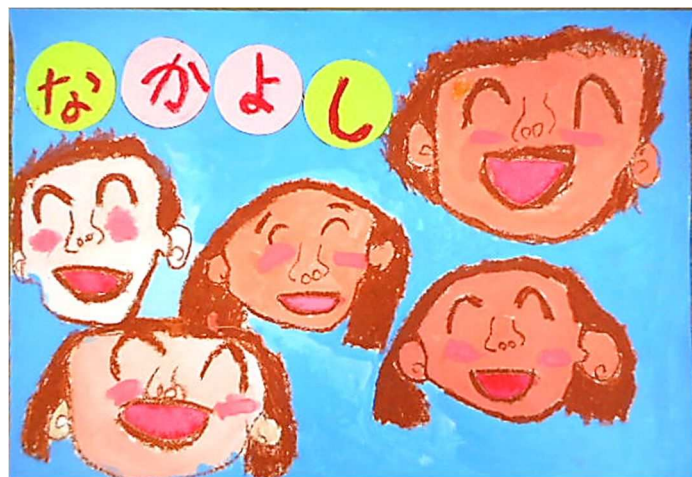
1年生



1年生



2年生



1年生



3年生



3年生



3年生



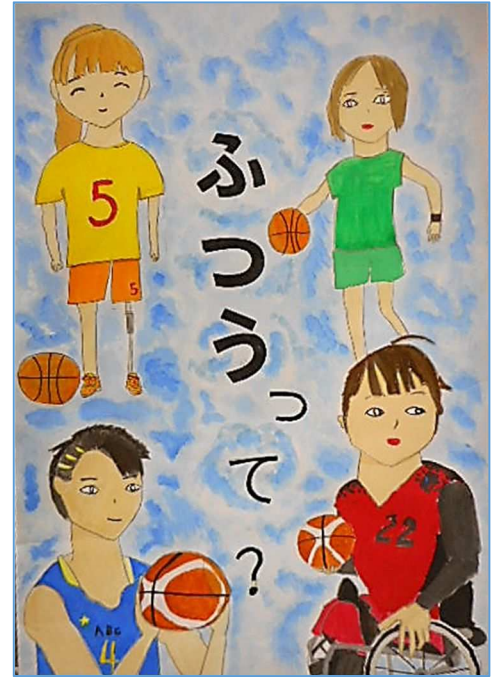
4年生



4年生



5年生



6年生



5年生



6年生



6年生

《中学生の部》



3年生



3年生



2年生



2年生



3年生

人権尊重都市宣言

すべての人々の人権が尊重される自由で平等な社会の実現は全世界共通の願いである。

しかしながら、現実の社会生活においては人権が侵害される事象が依然として存在しており、これを解消することは私たち全市民に課せられた責務である。

よって、当市議会は、あらゆる差別を撤廃し、すべての人々の人権が保障される明るく住みよい地域社会を実現するため、ここに人権尊重都市宣言を決議する。

平成3年3月27日

名張市



名張市子ども条例に基づく「ばりっ子会議」
考案キャラクター なばりん

一人権作品集—
2022年1月発行
名 張 市
名張市教育委員会
名張市人権啓発まちづくり事業推進会議

この冊子は再生紙を使用しています。